

よまたしちゆう こととせはかり いそじ み みのむし  
予又市中をさる事十年計にして、五十年ややちかき身は、蓑虫の  
みのを失ひ、蝸牛家を離て、奥羽象潟の暑き日に面をこがし、高  
すなごあゆみくるしき北海の荒磯にきびすを破りて、今歳湖水の波  
ただよう にお うきす ながれ あし ひともと かけ のきば  
に漂。鳩の浮巢の流とどまるべき蘆の一本の陰たのもしく、軒端  
ふき かき ゆいそえ うづき はじめ いら やま  
茨あらため、垣ね結添などして、卯月の初いとかりそめに入し山  
の、やがて出じとさへおもひそみぬ。

【大体の意味内容】

わたし わたし ともまた、都会の生活から離れて十年ほどたち、そろそろ五十歳にもなろうとしてい

る。蓑虫がその住み処である蓑を失い、蝸牛が殻を離れたよ

うに、自分の住み処を捨てて旅に出た。東北地方象潟の焼けつ

くような日差しに顔を焦がし、砂丘続きの歩きにくい浜辺を歩

いてきた。こうして北海の荒磯で踵を傷つけ、ようやく今年、

琵琶湖のほとりに漂い辿り着いた。鳩の浮き巢が流れ流れて

一本の葦の陰を頼もしく思つてとどまっている。それと同様に

して、この湖のほとりの小さな庵に、軒を葺き替え、垣を

付けたりして、人が住めるようにした。四月の初め、ほんの仮初

めの住まいにと思つて入った山なのであったが、もうこのまま、

この山を出まいとまで思い始めてしまった。

